
別れの値段

小織悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別れの値段

【Nコード】

N0129Z

【作者名】

小織悠

【あらすじ】

「私が別れようって言ったらどうする？」

憎ったらしいほどに幸せそうな可愛い表情で彼女は僕にそれを聞いた。

その時感じたこの言葉の意味には、実は深い意味はなかったのだらう。

めんどくさいやり取りに感じたそれは、ただ互いの思いやる気持ち確かめ合うだけのものだ。

かと言って相手にしない理由はなく、それでお互いに好きだっ
て言う気持ちをほんの少しだけ実感できるのは、普段から忙しいと偽る
僕にとっても大事なことだったのかもしれない。

【別れの値段】 作：小織 悠

「私が別れようって言ったらどうする？」

憎つたらしいほどに幸せそうな可愛い表情で彼女は僕にそれを聞いた。

その時感じたこの言葉の意味には、実は深い意味はなかったのだらう。

めんどくさいやり取りに感じたそれは、ただ互いの思いやる気持ちを確認かめ合うだけのものだ。

かと言って相手にしない理由はなく、それでお互いに好きだって言う気持ちをほんの少しだけ実感できるのは、普段から忙しいと偽る僕にとっても大事なことだったのかもしれない。

「僕は、別れないよ。君が別れるって言っても無駄だよ」

その時は、これが正解だなんて不覚にも思ってしまった。

周りを駆ける1月の冷たい風はこれから来る未来を映し出していた。

「ねえ。すごく寒いね」

「手をつなごうか…おいで」

手をつないで一緒に好きなことをして一緒に居る時間があつという間に過ぎるような気がして、僕は何でこんなに幸せなんだろうって本気で思った。

これから自分で本気で彼女を守っていかうって思っていたんだ。

付き合いは深まり、気がつくと僕の周りは彼女色に染まっ
ていて手に取るもの、身に付けるものすべてに彼女との思い出があるんだ。
でも

そんな幸せは些細な環境の変化で、変わってしまう。

彼女はバイトを始めて、僕は、4月からの就職先から内定をもらっ
た頃。

いつものような二人で居る休日を通して彼女の家で借りた映画を
見たりなんかして、

そろそろ帰ろうかとしたとき、彼女が僕に相談という別れをきりだ
した。

「あのね、相談があつて……あのね……他に好きな人が居るの」

呆氣にとられるつてのはこういうことだ。

言い訳ばかりをして、まっすぐに彼女の顔も見れず

にぎやかなバラエティのテレビの音量すら耳に入らなくなった。

やり場のない怒りを、強がって必死でこらえた事、昨日の事のように
に忘れることができない。

「正直どうしようか迷ったの……私の周りにはもうあなたでいっぱい
だし、嫌いなわけではないし、別れるのはすごく嫌なんだ。でも、
こんな気持ちなのにあなたと付き合ってたらあなたは辛いでしょう
？」

こつという恋の迷いを当人である僕に相談する時点で結果は見えてい
ると気がついたし、気持ちが冷めたのだと言わないのは、彼女にも
不安があるからなのは聞いてとれた。でも……きつと気持ちは変わ
らないのだろう。

だから僕はすぐにこつ答えた。

「いいよ。別に……恋愛感情がないなら無理してまで付き合うこと
ないよ。そのかわり、悪いけど……俺はすぐ次の恋を見つけるから
幸せになっ」

幸せに……よくそんなこと言えたなっと思う。

そういった意味じゃ唐突な別れに自分の気持ちがわからなくなった
のだろう。

「……ごめんね。強がってるんだよね、傷つけてごめんね」

その言葉を聞いて、もう……言い表すことのできない敗北感を感じ
た。

ごまかそうとした執着心を隠せるはずもなく、ひどく悲しい表
情で彼女を見つめていたのだろう。

「……じゃ、元気で」

彼女の部屋にたくさんあった僕との思い出はたった一日では片付け
られないほどの量だったはずなのに、その時手で持って帰れてしま
うほどに薄く軽いものに変わっていた。

帰りの車の中で泣いた。

軽く降っていた雨も強まってきたフロントガラスは滲んで、

ワイパーが僕の涙も一緒にぬぐってはくれないかと思うほどに冷た
いものに感じた。

どうしてももう一度声が聞きたくて

携帯電話を手にした。

すぐ電話に出てくれた彼女にどういったらいいのかわからなくて、

みつともない小さな声で彼女に言った。

「僕は、別れないんだ……約束したんだよ……君が別れるって言っても僕は別れないって……だから……もう一回だけでいいんだ……考え直してほしい……」

それから彼女は、僕にあえてひどい言葉を連ねては、僕の気にしていることか

嫌なこととかをたくさん言って嫌われようとした。そういう気持ちがすごく居た堪れなくて辛い。

「……でも、悪いのは本当に私だから。ごめんね」

そうやってまっすぐ謝られると、もう僕はどうしたら良いかわからなくなってしまうよ。

「ほんとにごめんね」

「後悔するよ？」

「……しないよ。だからバイバイ」

電話が切れた後、僕は小さくため息をついてハンドルによりかかるのだった。

普段片道30分の距離は、2時間近くも遠い回り道をしていた。

涙はいつのまにか冬の空っ風に吹かれ、枯れている。

続く【2話：無常】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0129z/>

別れの値段

2011年11月30日20時46分発行